

高山源五郎屋敷と谷村陣屋の位置づけについて

山梨県埋蔵文化財センター 網倉 邦生

はじめに

山梨県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の結果、甲府地方家庭裁判所都留支部から江戸時代を中心とした埋蔵文化財が確認された。都留市中心市街地は文献や絵図など様々な資料が残されており、考古学的な成果を歴史資料の文脈において分析することが可能である。今回の報告では、対比しうる歴史資料を検討した後に、調査結果と比較した。

1. 遺構の検出状況

発掘調査によって、近現代に造成された黄褐色土層の下に黒褐色土層が認められ、この土層の中に時期差を持つ複数の遺構が確認された。遺構の出土状況の特徴として、17・18世紀代の遺物を含む、該期に比定される遺構にも19世紀の遺物が混じることが挙げられる。また、18世紀代の水路と考えられる遺構の上面が削平され、遺構の下位のみ残存しており、水路の上に礫が集積した状況で出土した。これらの出土状況から、19世紀代に土地造成が行われており、17・18世紀代の遺構上面が削られると共に、生活面の上に構築された礫で構成される遺構が廃され、礫が水平にならされた状況で埋設されることとなったと考えられる。

このため、出土遺物から遺構の年代を推定すると同時に、文献資料と比較して検討を進めた。

2. 調査地点に係わる絵画・文献資料

・『甲州屋村城』年不詳

鳥居氏または秋元氏の支配における谷村城下町を鳥瞰的・立体的に表現し、谷村城・家臣屋敷・町屋などが写実的に描かれた絵図である。高山源五郎の屋敷地に比定される区画には、西側に門が設けられ、桧皮葺か柿葺の建物が2棟表現されている。

・『秋元但馬守様御家中御絵図』年不詳

宝永元年(1704)、秋元喬知の川越転封に際し、谷村城下町の記録を目的として作成された『谷村城下絵図』の写しである。家臣屋敷の各区画に家臣90人の氏名が記されている。この絵図により城下町における高山源五郎屋敷の位置を知ることができる。

・『差上申願証文之事』〔正徳四年(1714)〕

高山甚五兵衛(高山源五郎)は薪小屋を建てるため、隣接した町人地23坪を囲い入れたが、秋元氏の川越転封の後、町人から土地の返還が求められた。訴訟の結果、土地が返されることになったため、請書として作成されたのが本史料である。

・『城跡地割絵図』〔享保十年(1725)〕

谷村城や谷村城下町の家臣屋敷範囲が畑として表記されている中、谷村陣屋には建物が表現されている。他に南門・屈曲した水路が認められる。

・『御陣中先前仕来書上帳』〔天保九年(1838)〕

谷村陣屋に関わる村々の負担を定めた文書である。谷村陣屋の施設として、「御本陣老軒、御長屋四軒、御囲初蔵四戸、前同所番小屋壱ヶ所、板橋壱ヶ所、御陣内稲荷社」「御牢」が挙げられている。

・『下谷村屋敷割絵図』〔天保十五年(1844)〕

絵図には、谷村陣屋の敷地内に、桧皮葺か柿葺の陣屋1棟、桧皮葺か柿葺の長屋3棟、祠2基、水路、南門と西門が表現されている。

・『平井家蔵絵図』〔文久三年(1863)〕

絵図には、谷村陣屋の敷地内に、陣屋1棟、長屋2棟、鳥居1基、祠2基、水路、南門と西門が表現されている。

・『県令集覧』〔文久元年(1861)〕等

『県令集覧』等の資料によると、谷村陣屋詰の手代の人数は、寛政四年(1792)3名、天保九年(1838)4名、天保十四年(1843)4名、嘉永七年(1854)6名、文久元年(1861)5名、慶応二年(1866)5名と記載されている。

3. 遺構の時期区分と検討

1期〔谷村城下町期(鳥居氏段階)〕

16世紀後葉から17世紀前葉の陶器・土師質土器を含む10号溝状遺構が建物推定地で検出された。

2期〔谷村城下町期(秋元氏段階)〕

17世紀後葉の陶磁器・土師質土器を含む34号溝状遺構が敷地東側において南北方向に広がっていた。

3-1期〔谷村陣屋期(18世紀段階)〕

18世紀後葉の陶磁器・土師質土器を含む7号溝状

遺構が検出された。この遺構は19世紀代の造成及び近代の掘削により全体的な形状が失われているが、元は8号溝状遺構と連続し、屈曲した形状の水路であったと考えられる。

3-2期 [谷村陣屋期 (19世紀段階)]

19世紀中葉の陶磁器を中心に19世紀後葉までの遺物を含む16号土坑、3・26号溝状遺構や19世紀中葉に機能したと考えられる、1・2号石組、30号溝状遺構などが検出された。

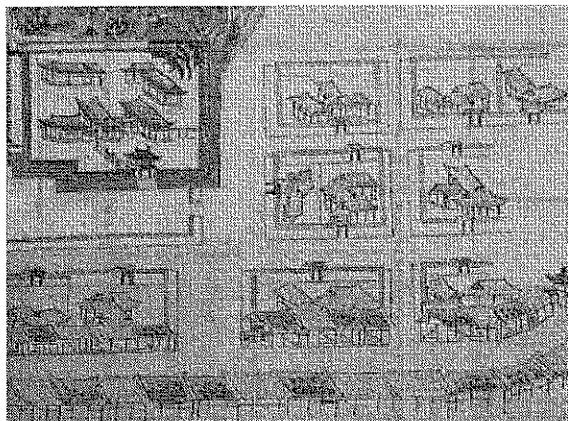
3号溝状遺構は南北方向に走向するが、絵図に描かれた水路と位置的に一致している。16号土坑は、遺構の底面に炭化米が認められたことから、食物貯蔵施設であったと考えられる。陣屋推定地内の北側で検出された3号石組は焼土の堆積や加工礫の形状から竈跡であった可能性を有する。1・2号石組、30号溝状遺構は、谷村陣屋の正門である南門と陣屋の間に位置し、遺構の底面に粘土が貼られ、覆土に炭化物粒子を含んでいる。74・76～79・114・119号土坑は、それぞれ長楕円形で、平面配置が規則的

に並ぶ形状を呈している。柱穴を持つ建物の存在を示唆していると考えられる。

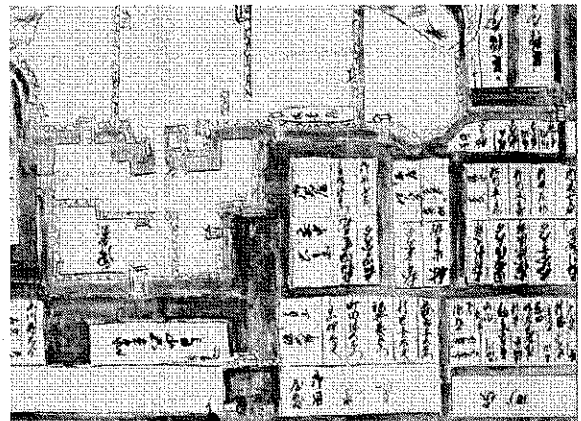
18・59号土坑からは、陶磁器と共に動物遺存体も出土しており、飲食を行った後に一括廃棄された可能性が指摘される。25号土坑は砂層が1m堆積した遺構であるが、水路の整備に伴い構築されたのかもしれない。

まとめ

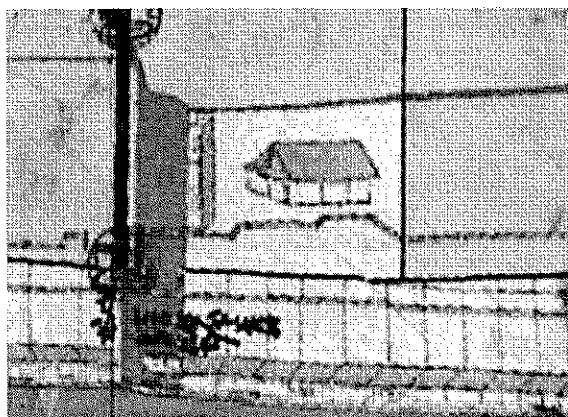
調査の結果、断片的ながらも17世紀の高山源五郎屋敷や18世紀の谷村陣屋の遺構が確認され、19世紀代の谷村陣屋については、絵図等の資料に記されていない遺構群が発見された。今回の報告では取り上げなかったが、奈良・平安時代や16世紀後葉の遺構も確認されており、古代多良郷内の遺構配置や谷村館など様々な問題を提起できることとなった。さらに、近代の谷村区裁判所は現代の地盤より下に埋まっていることが確認され、都留市中心市街地が有する文化財的な価値が再認識される調査となった。



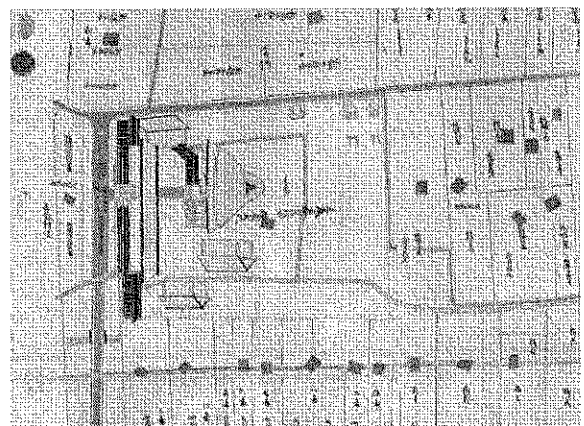
『甲州屋村城』[谷村城下町期 国立国会図書館蔵]



『秋元但馬守様御家中御絵図』
[谷村城下町期 都留市教育委員会蔵]



『城跡地割絵図』[享保10年(1725) 小俣家蔵]



『下谷村屋敷割絵図』[天保15年(1844) 都留市教育委員会蔵]

*絵図はいずれも調査地点周辺に該当する範囲のみを拡大して表示した。